

(様式2-2)

## I 学校の概要

### 思考力、判断力、表現力等の育成モデル校事業 高松市立鬼無小学校

#### ◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
2学級 48名	2学級 49名	2学級 53名	2学級 43名	2学級 46名	2学級 44名	3学級 13名	15学級 296名

○教員数 21名

#### ◆学校の特徴

本校の児童は、まじめでコツコツと努力し、家庭学習や自主勉強にも粘り強く取り組むことができる。昨年度まで主体的に学ぶ児童の育成を目指し、1時間の授業展開を「①課題をもつ②一人学び③協働的な学習④ふり返り」とパターン化し、ペア対話やグループ交流の仕方を工夫することで、児童一人一人が「分かる喜び」を感じられる授業づくりに取り組んできた。令和元年度香川県学習状況調査質問紙の結果は、どの項目もほぼ県平均を上回った。この結果から、協働的な学習に取り組む場面で、自分の考えを広げたり深めたりしながら、課題解決に向けて主体的に取り組む児童が増えてきたと言える。また意欲的に振り返る活動を行っていると感じている児童も多く、次時の課題や学習の見通しを自分なりに見つけ、さらなる意欲をもって学習に取り組むことができる児童が多いことが伺える。

## II 研究主題等

研究主題

自己の考えを広げ、深め、協働しながら学ぶ喜びを感じる児童の育成

#### ◆研究主題設定の理由

本校の児童は、基礎的な知識や技能は習得できていても、既習内容と関連づけて考えたり、様々な情報や知識を駆使しながら新しい考えを練り上げたりすることに苦手意識をもっている児童が多いことが課題としてあげられる。それは、思考のプロセスが身に付いていないことや、ねらいに向けて獲得した情報について重みや価値付けをしながら判断したり、目的に合わせて的確に表出したりする体験が少ないことが原因と考えられる。また、自分の思いや考えを根拠を加えて分かりやすく相手に伝える手段が十分身に付いていないため、双方向での深い交流が生まれにくく、対話を通して新たな知を生み出す喜びを感じる経験が少ないことも原因の一つと言える。

そこで、今年度は、まず思考のプロセスを身に付けさせる方法として考える手順を明示する。スキルやツールを活用することで、児童は自ら考え進めることができ、何度も手順をたどっていくうちに、やがて自分で考えが構築できるようになっていくと考える。次に、児童の考えを広げ、深めるために

教師が授業の中に効果的なしかけや思考場面を意図的に設定し、協働的な学び合いを通して思考する楽しさを体感させたい。そして、授業の終末に児童が充実感や達成感、一体感や喜びを感じられるようなふり返りを丁寧に行うことで、児童は学習の成果や自らの成長に手応えを感じることができるであろう。多様な内容に対して確実に思考力が働くようにすること、また結論のみでよしとせずその過程を表現させたり検討したりすることで、一人一人の思考力の育成を目指したい。

#### ◆研究内容及び方法

〈研究内容〉

- ・各教科の「見方・考え方」の明確化と思考場面の効果的な位置付け
- ・考えを構築するための思考スキルや思考ツールの活用
- ・自己の変容や次時の課題につながる「ふり返り」の充実

〈研究方法〉

- ・5本の校内研究授業、全教員の公開授業と研究討議から見えた成果と課題の分析
- ・「思考力育成マップ」の作成と実践交流
- ・思考力を高めるための板書研究
- ・思考力アンケート結果から見える成果と課題の分析

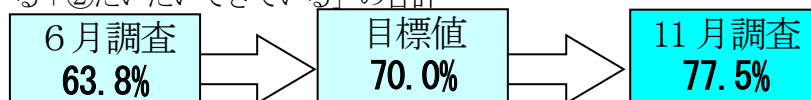
### III 研究実践

#### ◆指標設定と達成に向けた取組

##### 1 各教科の「見方・考え方」の明確化と思考場面の効果的な位置づけ

1 (教員) 授業の中で、児童の思考が高まるような場面を意図的に位置づけていますか。

指標 「①できている+②だいたいできている」の合計



##### 第4学年 国語「ごんぎつね」

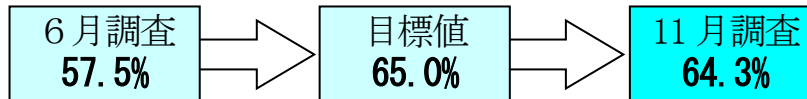
ごんがつぐないを始めた理由や、つぐないを続けるごんの兵十に対する気持ちの変容を場面と場面をつないでふり返った。気付いてもらえない虚しさや、それでも次の日にくりを持って行くごんの相反する行動を取り上げ「ごんはどんな気持ちでつぐないを続けたのか。」という本時の課題につなげた。気付いてもらいたいのに、常に兵十の背後にいる矛盾をごんと兵十の位置関係を図に表すことで視覚的に捉えさせ、「なぜ気付いてもらえるように持って行かなかったのか？」と問いかけた。児童は自分が考えたごんの思いを友達と比べたり、つないだりしながら交流し、単に兵十に物をあげることが幸せなのではなく、自分自身の気持ちが兵十とつながることが幸せだと気付くことができた。ふり返りの文章に、思考する楽しさやよさが見られ、それぞれの読みの深まりが感じられた。



## 2 考えを構築するための思考スキルや思考ツールの活用

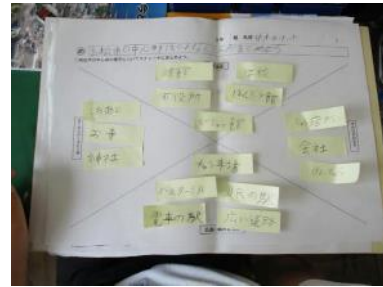
2 (教員) 児童の思考が深まるように、意図的に思考ツールを活用することができますか。

指標 「①できている+②だいたいできている」の合計



### (1) 第3学年 社会「市のようす」

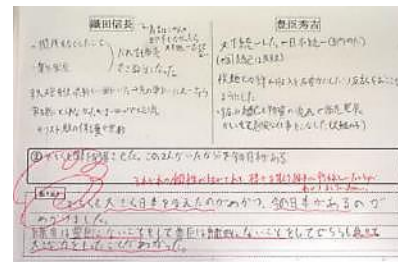
本単元ではまず、香川県内における市の位置、市の地形や土地利用、交通の広がり、主な公共施設の場所について、古くから残る建造物の分布などに着目しながら問いを見だし、市の様子について考えた。思考の助けとなるよう、写真や動画など、視覚的に捉えることができる資料を活用することによっ



て、イメージを持ちやすくした。そして、場所ごとの様子を比較したり、土地利用の様子や交通などを関連付けたりして考え、「公共施設」「古くから残る建造物」「交通に関わるもの」「それ以外の施設」の4つの観点ごとにXチャート上に整理・分類しながら貼り付けていった。この活動を通して、考える観点が明確になり、市の全体の様子を大きく捉え、場所による効果的な利用方法や人々の生活につながる交通と建物の関係などを理解することにつながり、児童の思考を深めることができた。

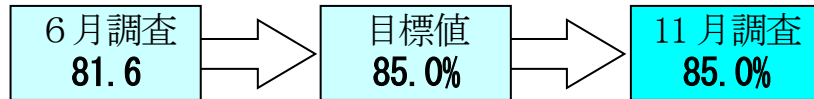
### (2) 第6学年 社会「戦国の世から天下統一へ」

導入では、「どちらの武将の働きが大きかったか。」と問いかけ、自分なりの考えをもって学習を始めた。織田信長と豊臣秀吉についてそれぞれの働きを整理した表を活用し、それぞれの武将に関する自分の考えを5つの観点でまとめることで、二人の武将の特徴が明確になり児童の思考を整理することにつながった。また、現代への影響や戦国の世に対する働きかけなど、様々な視点から考えたことをワークシートに記入し、それを使って友達と交流することで、考えを深めることができた。比較を繰り返すことで、それぞれの武将の良さや共通点を見つけたり、二人の活躍がその後の日本にどう影響を与えたかなどもに着目したりする児童も見られ、最終的にどちらの武将もこの時代に必要な存在であったという結論を児童の考えから導き出すことができた。また、二人の武将の行いが日本の商業や社会情勢に大きな影響を与えていることへの気付きも見られた。本時のふり返りでは、二人の武将についてもっと詳しく調べたい、他の視点でも比較してみたいと興味・関心がより深まったことがわかる記述が見られた。



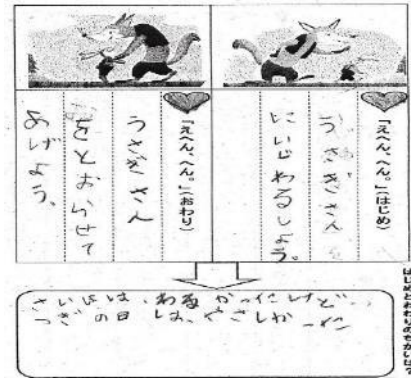
3 (児童) 思考ツールに表すことで、自分の考えをノートにわかりやすくまとめて書くことができますか。

指標 「①できている+②だいたいできている」の合計



### 第1学年 道徳「はしの上のおおかみ」

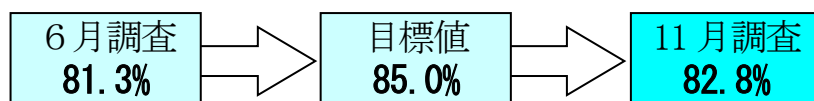
導入で、人権月間の取組や、学級チャレンジで友達のいいところを見つけたことを想起させることで、本時の課題「だれにでも親切にすること」につないでいくことができた。事前に、資料「はしの上のおおかみ」を読んだ感想や、みんなでいっしょに考えてみたいこと書かせておいたので、資料の概要をつかんだ上で、本時の学習に臨むことができた。初発の感想では、いじわるだったおおかみが最後には優しくなったことに気付いている児童や、いじわるなおおかみにも親切にしてくまの優しさが心に残ったという児童もいた。「えへん、へん。」という始めと終わりのおおかみの言葉を比べ、自分の考えをワークシートに書いた。それぞれのおおかみの気持ちをハートの色で表すことで、初めはいじわるだったおおかみが、終わりには優しいおおかみに変わったことにほとんどの児童が気付くことができた。次に、なぜ、おおかみは優しくなったのか、その理由をグループで話し合い、全体交流をした。「自分がいじわるしたことを反省したから。」「くまに優しくしてもらったことで、おおかみも優しくなったから。」「くまがおおかみの気持ちを考えていたから。」などの意見が出た。児童から出された言葉をつないで、「相手の気持ちを考えて優しくする」という本時のまとめへとつないでいった。



### 3 自己の変容や次時の課題につながる「ふり返し」の充実

4 (児童) 授業の最後にふり返しを行うことで、次の時間の課題や見通しが、はっきりもてるようになりましたか。

指標 「①できている+②だいたいできている」の合計



### (1) 第5学年 算数「面積」

新しい図形を求積する際に、既習の求積方法では求められず困っている児童の課題を次時のめあてにした。前時のふり返りを生かし、必然性を伴った課題を設定することで、どの児童も意欲的に課題に取り組むことができていた。それぞれが考えた台形の面積の求め方を色分けすることで、どの辺の長さに着目したか視覚的に捉えやすくなり、求め方は違っても同じ考え方を使って求積していることに気付いた。それを全体交流することで、台形の面積の公式に導くことができた。また、①ステップチャートでの一人学び→②考えの交流→③全く違うように見える式から共通する部分を見つける→④この方法を使って面積が求められる式（公式）を考える、と授業をパターン化することで、自分の考えだけでなく、友達の考えから知りたくなったことや解決したいことを見つけようとする姿が見られた。



### (2) 第2学年 生活「うごく うごく わたしのおもちゃ」

最初は、日常生活で出た廃材を使ってうごくおもちゃを作成し、みんなで遊びたいという思いだったが、活動をする中で1年生を招待して一緒に遊びたいという思いに変容、深化した。さらに、1年生に喜んでもらうためにはおもちゃをパワーアップする必要性を感じ、意欲の高まりが見られた。一人一人がどんな風にパワーアップしたいのかめあてを考え、そのめあてを達成するために、前時の学習のふり返りをもとに工夫を重ねた。ゴムを使って動くおもちゃ作りに取り組んだ児童は、「ゴムの太さを変えてみよう」や「ゴムの数を変えてみよう」、「ゴムの付け方を工夫しよう」とゴムの力による動きの変化に着目して挑戦した。反対に、上手くいかなかった児童は、「壊れにくい材料やしくみで作ってみよう」と考えを変えていく様子が見られた。風で動くおもちゃは、タイヤが回らず困っていたので、友達に聞いたり、うまく動いているおもちゃを参考にしたりして、改良を重ねた。このような活動を通して、ふり返りから気付きが繰り返され、考える力の高まりにつながった。おもちゃをさらによく動くようにするためには、いろいろと試してみることや、友達と一緒に話し合いながら活動していくことで成功につながることができ、その面白さや自然の不思議さにも気付くことができた。



◆特徴的な取組

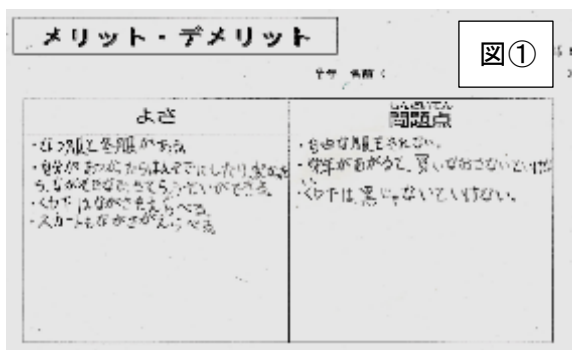
1 スキルアップタイムでの取組

「すべ」（考える視点や手順）を使って、比較・分類・関連づけながら自分の考えを構築し、それを思考ツールで具体化したり、可視化したりすることで思考力を高めるために、年間で18回の実践を行った。今年度は6つの思考ツールを繰り返し活用することで、ツールに表現された内容に高まりが見られるようになった。また、お互いのツールを交流することで、同じ題材でも視点が広がり少しずつ物事を多角的に見ることができるようになってきた。

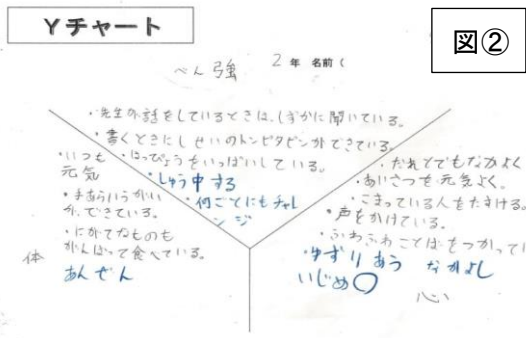
4/10	クラゲチャート（理由付け）① 「自分のめあてを作成する」	9/23	メリット・デメリットチャート② （多角的に見る）「給食について」
4/28	ウェビングマップ（分類・関連付け） 「学級のめあてを作成する」①	10/14	ベン図（比較する）② 「車と自転車について」
5/13	ベン図（比較する）① 「猫と犬について」	10/21	フィッシュボーン（見通す・構造化）② 「コロナにかからないために」図③
5/27	メリット・デメリットチャート① （多角的に見る）「制服について」図①	11/18	ベン図（比較する）③ 「よい話し方、よい聞き方」
6/9	Xチャート①（多角的に見る）「四季の自然」春・夏・秋・冬の4観点	11/25	ウェビングマップ（分類・関連付け）③ 「学級のめあてをふりかえる」
6/24	フィッシュボーン（見通す・構造化）① 「夏休みを楽しく過ごす」	12/9	クラゲチャート（理由付け）③ 「冬休みのめあてづくり」
7/1	クラゲチャート（理由付け）② 「なぜ宿題をしなければならないのか」	1/13	メリット・デメリットチャート② （多角的に見る）③「ゲームについて」
7/8	ウェビングマップ（分類・関連付け）② 「自分のクラスについて」	1/27	Xチャート（Yチャート・Wチャート）③ （多角的に見る）
9/14	Yチャート②（多角的に見る） 「2学期のめあて」図②	2/10	フィッシュボーン（見通す・構造化）③ 「1年間の自分の成長について」



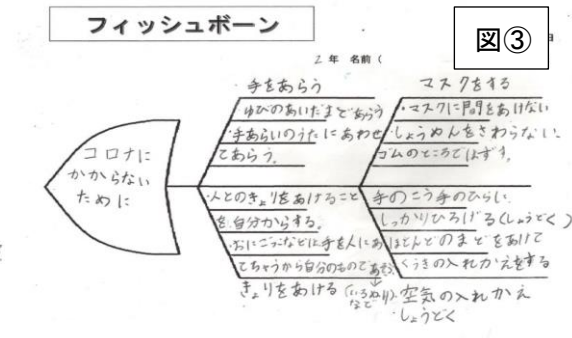
お互いの思考ツールを交流する様子



図①



図②



図③

## 2 教員研修の取組

### (1) 思考力についての共有化

全職員で、各学年の児童の思考力についての実態を把握し、付けたい力や目指す姿を共有した。その際に、教員自身もウェビングマップを経験することで、思考ツールについて具体的なイメージをつかむことができた。今年度は、コロナ感染予防対策のため6月まで臨時休校となったため児童の実態がよくわからないまま研究をスタートさせなければならなかったこともあり、全職員で本校がめざす思考力について共有することは大変意義があり、お互いの情報交換にもつながった。



### (2) 思考力育成マップの活用

教員自身が思考力育成のための具体的な取組が十分イメージできないまま1学期を終えてしまったという反省点から、もう一度児童の実態を見直し、付けたい力を明確にする必要性を感じた。そこで、夏休み中に1学期の成果と課題をもとに、2学期に向けて思考力を育成するための具体的な取組を「思考力育成マップ」にまとめた。1単元の授業を「導入」「探求」「振り返り」に分け、それぞれの場面で、板書や発問、ワークシートなど思考力を高めるための工夫を明確にすることで、個々の授業に深まりが見られた。また、冬休み中に自分自身の取組を振り返り、そこから見える成果と課題を全体で交流する場を設定した。それぞれの実践を話し合うことでお互いの刺激になり、授業力を高めるよい機会になった（別添資料）。



### (3) 思考力を高めるための板書の工夫

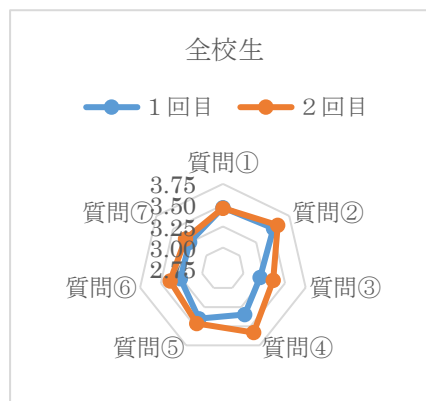
思考力を高めるためには、課題解決に迫るための効果的な板書が不可欠である。しかし、ほとんどの教員が普段の授業で行っている板書が、児童の思考力育成につながっているのかどうか不安に感じており、効果的な板書の在り方について学び合う必要性を感じていた。そこで、低・中・高学年の3グループに分かれ、具体的な授業の流れと児童の反応を説明しながら、ねらいに即した板書であったかどうか検討し合った。それぞれの板書には、児童の思考が深まるような思考ツールの活用や、学びが視覚的に捉えられるような時系列や対立軸を用いた整理の仕方など、様々な工夫が見られた。話し合いを通して、お互いの板書のよさを取り入れ、さらに児童の思考力や表現力が高まるための効果的な板書の在り方について共通理解することができた。



## IV 研究の成果と課題

### 1 成果

- (1) 思考力アンケート結果から、全体に2回目の方が数値に伸びが見られた。特に、質問⑥「思考ツールに表すことで、自分の考えをノートに分かりやすくまとめて書くことができますか。」では、自分の考えを様々な思考スキルを使ってツールに表現する活動に継続して取り組んだ成果だと考えられる。また、授業の終末に教師が視点を明確に示しながらふり返りをさせることで、内容にも深まりが見られ、自己達成感や有用感が伺えた。



- (2) 思考力育成のための具体的な取組が見える授業づくりを目指して、今年度は5本の校内研究授業と1人1本の公開授業を行った。授業後の討議では、思考場面の設定の仕方や思考を促す発問・ワークシートの工夫などを、「見通し・探求・ふり返り」の大きなまとまりに分けて話し合った。①「Xチャート」を活用することによって、考える観点が明確になり、児童の思考が深まることにつながった。②ステップチャートを活用し、自分の考えを順序立てて考えたことで、発問に対してのつぶやきや発言から思考の高まりを感じられた。③ゆさぶりを言葉を変えながら発問することで、児童の深い思考を促すことができた。④思考ツールは、目標を明確化するのに有効であり、ふり返りの文章から気づきの質の高まりが伺えた。など、その都度、研究討議から見えた成果と課題を明確にして、次の研究授業に生かすことができた。また、どの公開授業にも教師のねらいに沿った思考場面の効果的な設定や、思考ツールの活用、見通しがもてる導入やふり返りの工夫など思考力を高めるためのたくさんの手だてが見られ、教師自身の授業力も高まった。



### 2 課題

- (1) 今年度は児童に思考のプロセスを身に付けさせるために、思考ツールの活用を中心に研究を進めてきた。しかし、初年度ということもあり様々な思考ツールの使い方や使用場面の理解にとどまり、実際の授業の中で思考ツールを有効に活用して思考を高めるまでには至らなかった。教師が主体となり、児童が必要感をもって思考ツールを活用している姿をめざすことも今後の課題である。次年度は主体的に児童が思考を構築する際に自由にツールを選択する経験を積み重ねていくことで、ツールが思考の手助けとなり、自ら思考の方法を見つけ、論理的に表現できる力を身に付けさせたい。
- (2) 授業の終末の場面で、児童が自らふり返りをしたくなるような工夫が大切である。何のためにふり返りをするのか、目的や利点を教師が明確にし、達成感を感じて児童が自分自身の学びに価値付けができるようなふり返りの方法を研究していく必要がある。



(別添資料)

思考力育成マップ

担当 ( ) 氏名 ( )

児童の思考力に関する実態

課題	よいところ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力差が大きく、自分の考えを主体的に述べる児童と、自信がなくつねに受け身の児童の2つに分かれている。</li> <li>・読解力が十分身に付いていないため、問われている内容が理解できず、自力解決が難しい児童が3割近くいる。</li> <li>・社会や理科など資料を読み取る力が弱いため、何を手がかりに考えればよいのか困っている児童が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほとんどの児童が意欲があり、頑張ろうと努力する。</li> <li>・自分の考えや思いを、自分の言葉で表現できる児童が増えた。</li> <li>・図工では、設計図や下絵を描くことで自分のイメージを膨らませ、思考しながら作品づくりに取り組むことができる。</li> <li>・全体交流で、自分の考えを友達考えと繋ぎながら考えることで、自分の高まりを「ふりかえり」に書くことができる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童に「問い」をもたせるための課題設定の仕方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・興味がわき、生活場面とつないで考えられるような導入を工夫することで、児童が解決したいと思う意欲を高める。</li> <li>・何のために解決するのか具体的に示すことで見通しをもたせる。また、「○○さんに聞いてもらいたい」というような相手意識が生まれるようなゴールを設定する。</li> <li>・「やってみよう」「どうにかして解決したい」など、わくわくしながら自発的に取り組みたいと感じる課題を設定する。(簡単に解決できない課題)</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的に課題解決に向かう学習活動の組み方(思考場面の設定)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・導入で既習とつなぎながら、自分でその時間の課題設定を行うことで、自分なりに解決の見通しがもてるようにする。</li> <li>・ペアやグループ交流が難しいため、児童が自分の考えをまとめたノートやワークシートを机の上に広げておき、それを黙ってお互いに見合える時間を設けている。全員の考えを見取った後、よいと思った友達の考えを自分の考えに加えたり、修正したりすることで自分の高まりが実感できるよう工夫している。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・思考を高めるような構造的な板書の工夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・矢印や色分け、ツールの活用など、児童の思考の流れが整理しやすい板書を行う。</li> <li>・児童のワークシートやノートと同じ板書にすることで、支援を要する児童も何を考えればよいのか具体的に分かりやすくなる。</li> <li>・一人一人の考えを書いた短冊用紙を黒板に貼り、全員で操作しながら思考を練り上げていくことで、視覚的に思考の流れが分かりやすくなる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・考えを築するための思考ツールの活用 ワークシートの工夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思考の過程が残るノート指導を行ったり、読み取ったことを絵や図と大事な言葉を結びつけながらまとめられるようなワークシートを工夫したりする。</li> <li>・国語では、導入で全文を読んだ後、自分が分かったことや課題を思考ツールに整理することで、書かれている内容が把握でき見通しをもって課題解決に臨むことができる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・思考を高める発問や助言の工夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「どうして?」「本当にそう?」など問い返したり、ゆさぶるような発問をすることで、児童が自分の考えに疑問をもち、さらに深く思考する時間を設けている。</li> <li>・国語や道徳では多方面から考えられる「問い」を工夫し、立場を決めて思考したこと、違う立場からさらに思考させることで、考えが広げられるようにしている。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・思考を表出するための話型の工夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICT機器(拡大提示装置)を活用し、自分の考えを視覚的に根拠を示しながら筋道だてて発表する場を多く設定することで、発表者は相手に伝わりやすい発表の仕方を身に付けている。また、フロアの児童も、自分の考えと比較しながら聞くことで、発表者に「質問があります。」「違う考えがあります。」など、自分の考えを発表者の意見と繋ぎながら述べることでできている。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価につながるふりかえりさせ方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的に「ふりかえり」の視点を示すことで、児童が何を書けばよいのか具体的にイメージできるので、「ふりかえり」の内容に深まりが見られる。</li> <li>・図工や国語など表現物に、自分の「ふりかえり」だけでなく友達からの評価も加えるようにしている。そうすることで、友達の良さに気付いたり、友達からの賞賛が自信につながったりして、お互いに学び合うことができている。</li> </ul>
<p>めざす子どもの姿</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わからないことを恥ずかしく思わず、自分の考えに自信をもって自分を表現できる。</li> <li>・受け身でなく、課題に対してどうにかして自分で解決しようと悩んだり困ったりする経験を積み、たくましく生きる力を身に付ける。</li> <li>・考える楽しさを知り、未知の課題に対し解決しようと様々な方法を使って多様な考えをもつことができる。</li> </ul>

1 研究主題

自己の考えを広げ、深め、協働しながら学ぶ喜びを感じる児童の育成

2 研究の具体

気づき、考え、高め合う学びの創造  
～思考の過程を重視した授業改善と実践の場の充実を通して～

考え、表現することに  
喜びを感じる子

【学力向上部会】

【心と体部会】

- ・ものの見方・考え方を働かせた、思考のプロセスの明確化
- ・考えを広げ、深めるための協働的な学習の工夫
- ・思考を深めるためのノート指導と構造的な板書の工夫



- ・具体的な視点にもとづいたふり返りの工夫
- ・スキルアップタイムでの思考ツールの習得
- ・授業研究から見える成果と課題の分析
- ・思考力アンケートの分析と考察



思考力  
判断力  
表現力

- ・支持的風土のある学級をめざして、めあて達成に努める「学級チャレンジ」
- ・縦割り班で、相手を思いやる心を育てる「なかよしタイム」



- ・あいさつで心がふれ合う「小中合同あいさつ運動」



- ・地域に感謝し、貢献するために地域の清掃に臨む「鬼無クリーン活動」



自ら問題に立ち向かい、  
解決しようとする意欲

3 研究の検証及び改善の手立て

- 思考力アンケート結果から、ほとんどの学年で数値に伸びが見られた。
- 公開授業では、教師のねらいに沿った思考場面の効果的な設定や思考ツールの活用、見通しがもてる導入やふり返りの工夫等、思考力を高めるためのたくさんの手だてが見られ、教師自身の授業力も高まった。
- 思考を構築する際に自由にツールを選択する経験の積み重ねや、達成感を感じ、自分の学びに価値づけできるようなふり返りの工夫を研究していく必要がある。

